

奈良県御所市

今出遺跡

—第1・4次発掘調査報告—

平成19年(2007年)3月

御所市教育委員会

例　言

1. 本書は、工場増築工事に伴う事前調査として、国際化工株式会社の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市蛇穴 230-1 ほかに所在する今出遺跡第1・4次調査地の発掘調査報告書である。
2. 現地調査期間は以下の通りである。
第1次調査 平成2年2月27日～同年3月2日
第4次調査 平成18年2月1日～同年3月23日
3. 調査は、いずれも御所市教育委員会 技術職員 木許 守が担当し、調査補助員として、第4次調査に関しては、東野茂樹・青木美香（関西大学大学院生）が参加した。作業員の派遣は株式会社アートが担当した。また、現地調査および整理作業を通じて、藤田和尊（御所市教育委員会）の協力があった。
4. 本書の作成にかかる整理作業には、青木のほか、中久美子・宮脇聖子・松村朋美が参加した。
5. 本書の執筆・編集は木許が行った。
6. 摂図の製図は、青木が遺物を担当し、その他を木許が行った。また写真撮影は遺構・遺物とも木許が行った。
8. 引用・参考文献は、本文末尾に一括して掲げた。
9. 本書で用いた「北」は「磁北」である。
10. 現地調査および本書刊行にかかる費用は、国際化工株式会社がすべて負担した。関係各位にご理解・ご協力をいただいたことを記し、深謝します。

本文目次

1. 位置と周辺の遺跡	1
2. 調査の契機と経過	3
3. 調査の成果	
1. 第1次調査	5
2. 第4次調査	7
①調査地の基本層序	7
②遺構	10
③遺物	16
4.まとめ	26

挿図・表目次

図1 今出遺跡周辺の遺跡分布	
図2 調査地と周辺地形	
図3 第1次調査 調査区配置図	
図4 第1次調査 調査区北壁断面図	
図5 第4次調査 調査区遺構配置図	
図6 第4次調査 調査区土層断面図 1	
図7 第4次調査 調査区土層断面図 2	
図8 第4次調査 流路断面図	
図9 第4次調査 上層流路護岸杭 立面図 1	
図10 第4次調査 上層流路護岸杭 立面図 2	
図11 第4次調査 出土土器 1	
図12 第4次調査 出土土器 2	
図13 第4次調査 出土杭 1	
図14 第4次調査 出土杭 2	
図15 第4次調査 出土杭 3	
図16 第4次調査 出土杭 4	
図17 第4次調査 出土杭 5	
図18 第4次調査 出土杭 6	
出土土器 総観察表	

図版目次

図版1 第1次調査 全景（西から）	
図版1 第1次調査 全景（東から）	
図版2 第4次調査 調査区全景（北西から）	
図版2 第4次調査 流路 検出状況（北から）	
図版3 第4次調査 下層流路 南端断面	
図版3 第4次調査 下層流路 G-H断面	
図版4 第4次調査 流路検出状況（東から）	
図版4 第4次調査 上層流路 護岸杭検出状況 (北から)	
図版5 第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り 状況	
図版6 第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り 状況	
図版7 第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り 状況	
図版8 第4次調査 出土土器（その1）	
図版9 第4次調査 出土土器（その2）	
図版10 第4次調査 出土杭（その1）	
図版11 第4次調査 出土杭（その2）	
図版12 第4次調査 出土杭（その3）	
図版13 第4次調査 出土杭（その4）	

1. 位置と周辺の遺跡

今出遺跡は、御所市今出のほか、池之内・蛇穴の一部がその範囲内に当たっている。遺跡地図には東西 850 m、南北 500 m 程の範囲が示されている。この地点は、御所市域ではほぼ中央部に位置していて、標高 98 ~ 100 m 前後の平地部に立地している。

図 1 に見えるように、遺跡の南には、弥生時代から古墳時代前半の遺構が検出される中西遺跡が所在し、さらに中期前葉の室宮山古墳、後期に盛行する巨勢山古墳群がある。遺跡の北方向には、葛城川の対岸に当たる、弥生時代の大集落として著名な鴨都波遺跡が存在している。このように、今出遺跡の周辺は、いわば遺跡の密集地ともなっている。次に、今出遺跡の所属時期である弥生時代・古墳時代を中心に、周辺の遺跡を見ていこう。

まず、鴨都波遺跡については、その開始時期について、第 20 次調査で遺物包含層から縄文晩期末の土器が出土しており（川上ほか 2004）、その時点にまで遡る可能性も考えられるようになっている。また、古墳時代への継続は、住居跡などをはじめとする古墳時代の遺構の存在が知られ、近年は、第 15 次調査地で豊富な副葬品を出土した鴨都波 1 号墳（藤田・木許 2001）が検出されたほか、近辺で木棺墓や土坑、溝、ピットなど各種の遺構の存在が判明した。また、第 16 次調査地（阪本 2002）でも、古墳時代前期の溝、後期の住居址が検出されている。これらの成果から、各時間での連続性について慎重な検討が必要はあるが、鴨都波遺跡の、比較的長期間にわたって存続した集落としての姿が浮かび上がりつつある。

葛城川の左岸に当たる葛城山・金剛山の山麓部には、この鴨都波遺跡のほかにも、古墳時代の集落が多く営まれている。鴨都波遺跡から南に辿ればまず櫛原遺跡がある。古墳時代前期の溝や土坑などが検出され、布留式土器の一括資料が得られている（藤田 1994）。

森脇遺跡は発掘調査による全体像の掌握には至っていないが、御所市教育委員会が実施した小規模な立ち会い調査（1990 年 1 月）とトレンチ調査（1996 年 1 月）の所見によれば、古墳時代後期の遺物包含層が存在することは確実である。地山をベースとする土坑などもみられており、当該期の集落であった可能性が高い。

その南数百 m に位置する名柄遺跡は、中期後葉から後期前葉にかけての豪族の居館跡と考えられる遺構が検出された（藤田 1991）ことでも著名である。また、居館遺構の北側にあたる遺跡の北辺部で行った発掘調査（木許 1995）では、ピット群や溝などの遺構も検出されている。ピットの形成時期は不詳ながら、上面を覆っていた包含層出土の土器は布留式の前半期を主体とするようで、居館遺構より先行する集落の存在を予想せるものであった。

名柄遺跡や森脇遺跡の実態を窺うための資料は現状ではあまりに乏しい。しかし、名柄遺跡はその内に豪族居館を含むとみられる点で特異であるものの、周囲にはそれと同時期もしくは先行する時期の集落の広がりが想定できる。森脇遺跡の性格についてはなおさら不明であるが、やはり古墳

時代の集落跡とすれば、近接するこの2遺跡が、現状では時期的に継続しているようにみえる点は興味深い。より新しい時期の森脇遺跡に名柄遺跡と同様の遺構が存在する可能性も全くないとはいえないだろう。

さて、このような森脇・名柄遺跡のさらに南には、中期中葉以降の遺跡として、広域の空間に住居・生産・祭祀の要素が散在する南郷遺跡群（坂編 1996 ほか）が広がっている。

このように、南葛城地域の葛城山・金剛山の山麓部には、同じ古墳時代でも、やや形成時期を遅え、同時期の場合には互いに性格の異なる集落が営まれていたとみられる。

一方、本遺跡の所在する葛城川右岸地域では、弥生・古墳時代の集落遺跡である中西遺跡が、本遺跡に南接している。

中西遺跡（木許 2005 ほか）は、さらにその南に接する室宮山古墳（秋山・網干 1959・木許編 1996 ほか）の築造に関わって形成された集落であるとも考えられる。すなわち、室宮山古墳は中期前葉に築造された墳長 238 m の威容を誇る前方後円墳であるが、中西遺跡では、当該期に併行する遺構、遺物が検出されている（関川 1989・木許 1991 ほか）。また、これとは別個に弥生時代前期後半の遺構も検出されている（木許 1990）。ただし、現状では弥生時代の遺構と古墳時代の遺構は形成時期として連続するものではない。今後の資料増加に关心が持たれる所である。



図1 今出遺跡周辺の遺跡分布(S.=1/50,000)

2. 調査の契機と経過

今出遺跡における、これまでの調査地は図2に示したとおりである。このうち、第1次調査と第4次調査は、国際化工株式会社からの依頼に基づいて実施したものである。

第1次調査は、平成元年9月、同社に隣接する御所市蛇穴225-4・227-1において、駐車場造成を目的とする発掘届が提出されたことにより実施した。

工事は、基本的には盛土によるもので、現地表から掘削を行う擁壁部分についてのみ発掘調査を行った。そのため、調査区は工事による掘削に合わせた、幅約1m、長さ約50m、深さ約60cmが対象になり、同形状のトレーニングを設定した。なお、トレーニング内の6箇所に幅30cmほどの小トレーニングを設定して、土層の堆積状況の把握に努めた。このため、この部分の調査による掘削深度は現地表から1m程になっている。

調査期間は、平成2年2月27日から同年3月2日まで、実働日数は2日であった。調査面積は約50m²である。



図2 調査地と周辺地形(S.=1/5,000)

第4次調査は、平成17年4月に提出された、同社の自社工場増築工事を目的とする発掘届に基づいて実施した。対象地の地番は御所市蛇穴230-1・231-1・232-1である。

同社は、平成7年頃から、同地についての同内容の工事を計画しており、すでに平成7年10月に工事目的の発掘届が提出されていた。この時点では、対象地の遺構の存否確認を目的とした試掘調査をまず行うことになり、実際に平成7年10月24日～10月27日の間に実施した。

試掘調査の結果、当該地には弥生時代後期以降の上下層に重なる流路が、少なくとも2本が存在することが確認され、そのうち上層流路には護岸のためとみられる木杭が伴うことも認められた。また、遺物は弥生土器片や古式土師器片・加工痕のある木器が検出された。この試掘調査によって、同地に何らかの建築工事を行う場合、本調査が必要であることがこの段階で明らかになった。当市教育委員会は、以上の調査結果を直ちに事業者および奈良県文化財保存課に報告した。一方、事業者側は、掘削工事を伴う場合には本調査が必要であることを十分に認識した上で、一旦、地下に影響のある工事は行わず、同地に盛土を行って社員用駐車場として利用するとされたので、この時点での本調査は実施しないことになった。

その後約10年が経過したが、同社は、平成17年度に入って同地における工場増築計画を本格化され、埋蔵文化財の取り扱いについて当市教育委員会と協議を行った。上記の試掘調査によって本調査が必要なことはすでに明らかであったので、当市教育委員会は、同社に改めて発掘届出を提出するよう求め、これを奈良県教育委員会に進呈する一方、原因者負担による発掘調査およびその内容について理解を得たうえで、調査に伴う各種事務手続きを進めて、調査員の配置を含む発掘調査体制を整えた。

現地調査は、平成18年2月1日～3月23日に実施した。実働日数は29日であった。調査は、当初、建築面積に相当する約1,030m²を対象にしたが、後述するように、試掘調査で検出された流路より東側にあたる、対象地の東半は、出土遺物の量も極端に少なく、遺構が存在する兆候も認められなかった。敷地内での残土置き場の問題もあったので、特に対象地東端部は東西方向の幅6mと幅3mの2本のトレンチを設定して、遺構が存在しないことを確認したうえで、調査対象からは外した。この結果、発掘調査面積は815m²になった。

なお、第2次調査・第3次調査については、いずれも御所市教育委員会が実施したものである。第2次調査は、平成元年度に御所市が行った道路改良を目的とした擁壁工事に伴う立会調査である。第2次調査は厳重立会としたが顕著な遺構、遺物は認められなかった。

第3次調査は、平成14年度に実施した個人住宅建築にかかる事前発掘調査である。杭打ち工事を伴ったために、最大深さ3.6mまでを掘削した。調査区では河道の堆積土がみられた。埋土から自然遺物である枝葉多数のほか、若干の土器片と加工木が検出された。須恵器片の型式から、この河道は平安時代のものであるとみられた。

3. 調査の成果

1. 第1次調査

前述したように、第1次調査では、幅約1m、長さ約50m、深さ約60cmの細長い調査区を設定した。トレンチ状に掘削した調査区の北壁断面を図4に示した。図4-1層と図4-2層はそれぞれ耕作土と耕作床土で、その下層に、粘土混じり砂・粗砂・細砂・シルト・粘土が折り重なるよう堆積している状態が確認できたが、遺構は検出されなかった。堆積土の土質やその状態から、これらは洪水などによって形成されたものとみられる。

また、可能な限り下層の状態を確認するために、隨所に、幅30cmほどの小トレンチを北壁際に設定したところ、調査区の東端から22mまでの距離に設定した3箇所の小トレンチで、現地表下約80cmで木片等有機質を含んだ黒灰色粘土層(図4-8層)を検出した。調査区の掘削面積や深さに制約があるので同層の性格を追求することはできなかったが、そのあり方から、同層は一定期間の滞水状態の元で生成したとみらる。つまり、調査区の東半から東方向にかけては、ある時期に池か沼地であったことがイメージできる。

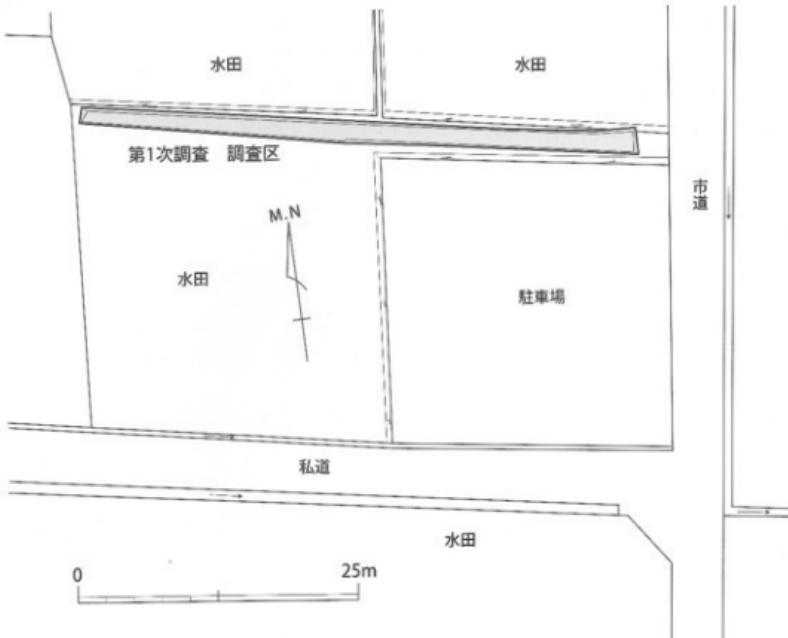


図3 第1次調査 調査区配置図(S.=1/500)

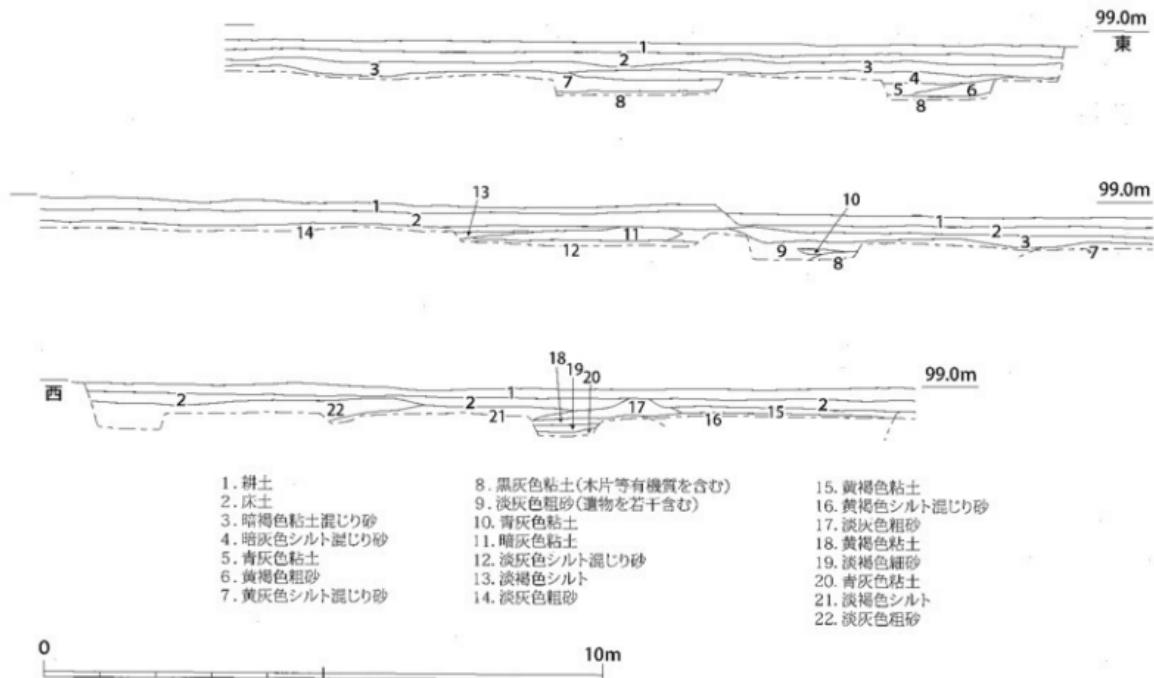


図4 第1次調査 調査区北壁断面図 (S. = 1/100)

遺物については、粗砂層などから古墳時代の土師器5点を検出した。いずれも細片化しており、表面の摩滅も著しいことから、洪水などに伴ってローリングを受けていると考えられる。

2. 第4次調査

①調査地の基本層序

調査区内の層序は、北壁・西壁・南壁で作成した土層断面図を図6・図7として示した。調査は

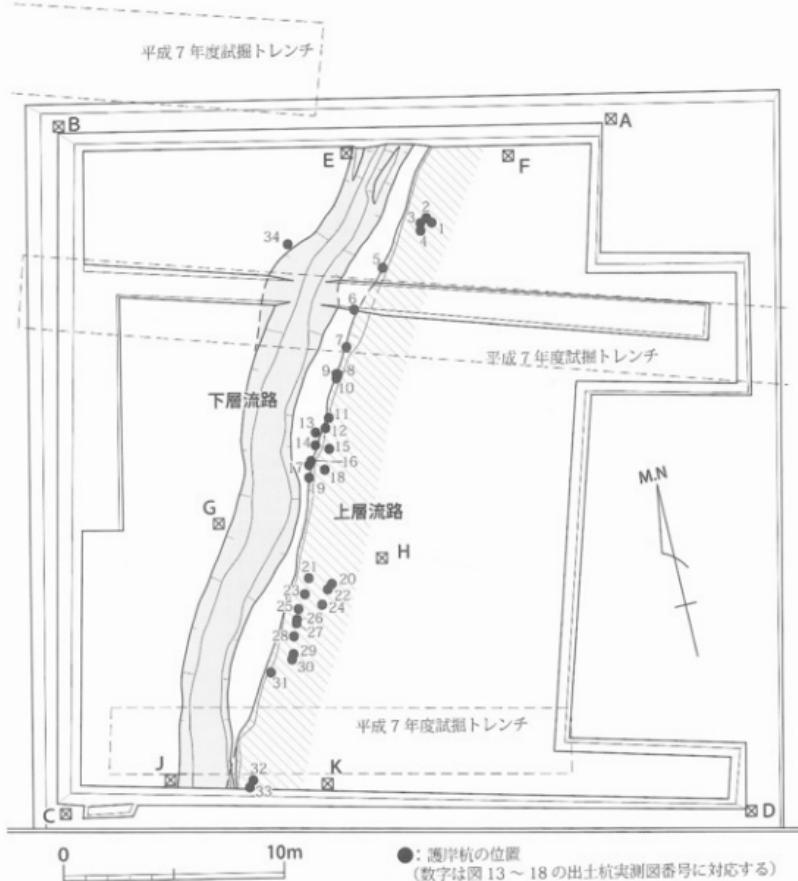


図5 第4次調査 調査区遺構配置図 (S.=1/250)

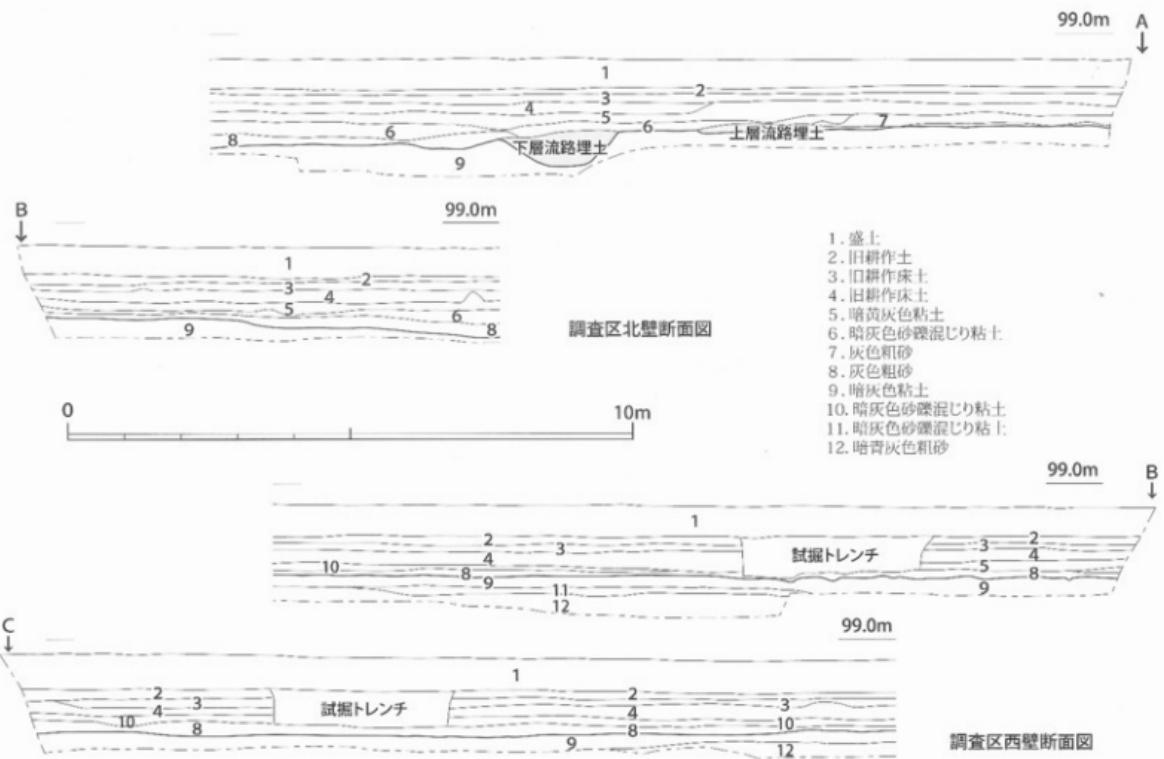
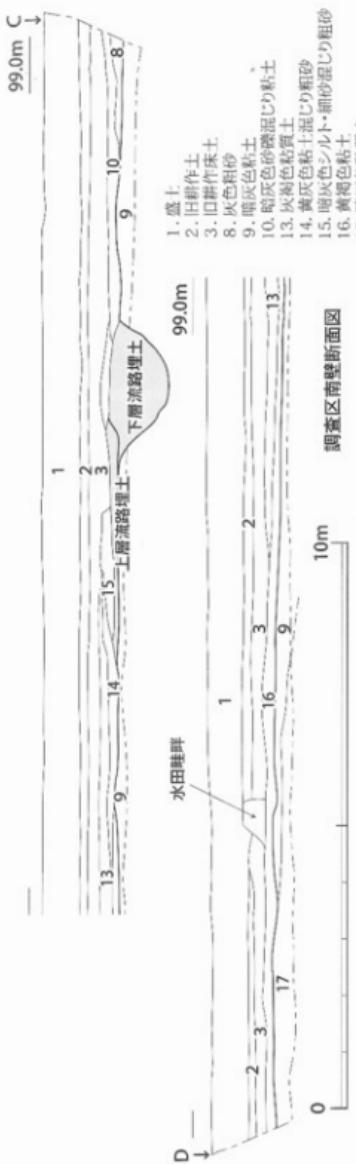


図6 第4次調査 調査区土層断面図1 (S.=1/100)



平成7年度の試掘調査で設定されたトレンチを再検出することをまず念頭に置きつつ、調査区の西端から掘削を開始した。特にこの調査区の西端部には、試掘トレンチが及んでいない下層の遺構・遺物の存否を確認するために、適時、新たなトレンチを設定した。そのトレンチの深さは最深部で現地表下約2m、旧耕作土下約1.4mまでであった。

このトレンチを掘削したことは、調査区の基本層序の理解に一定程度役立った。すなわち、図6一下図に示したように、調査区の土層は基本的に単純な水平堆積になっていて、現盛土(1層)・旧耕作土(2層)・旧耕作床土(3・4層)の下層は、層厚約10cmの黄灰色か暗灰色系の、砂礫が混じる粘土層(5層・10層)、層厚10~20cmの灰色粗砂(8層)の水平な堆積がみられ、暗灰色粘土層(9層)に至っている。9層の粘土は、5層や10層の粘土よりもさらに粒子が均一で、乾けば硬く締まる土質である。

このような土層の堆積状況は、平成7年度に作成された試掘調査時の土層断面図ともよく対応したので、遺構面はこの粘土層(9層)をベースにすることがすぐに察知された。また、5層や10層には遺物の出土も見られなかつたので、重機での掘削は粗砂層(8層)の検出をまず目安にして、この後、この粗砂層を人力で除去することで粘土層(9層)の上面を検出しつつ、東方向に調査区を広げていった。結果的に、この粘土層上面で後述する上層流路と下層流路を遺構として検出した。

一方、この粘土層の下層においても遺構面の存否確認しておく必要があった。そこで調査

区西端に当初設定したトレンチに加えて、北端に設定した排水溝を兼ねたトレンチにもやや深く掘削する地点を設けた。図6-上図の調査区北壁断面図を見ると粘土層（9層）の厚みは50cm以上あることが判る。しかし、同一下図の調査区西壁断面図では粘土層（9層）の層厚は比較的薄くなつておらず、その下層には青灰色粗砂（12層）などが分厚く堆積していた。また、図7の調査区南壁断面図にも見えるように、9層は調査区の南東端近くでなくなり、そのレベルで、その下層に堆積していた砂質土（17層）と置きかわっている。

このように、今次調査で検出した遺構がベースとする9層も、層厚自体が必ずしも安定的ではなく、面的にも調査区の東端部では途切れている状態であった。また、トレンチ内ではこの9層からも遺物が出土した。図11に掲げた土器実測図のうち、(11-7)・(11-8)・(11-9)がそれである。しかし、その出土量は極めて少なく、トレンチの中で9層を掘削した部分は都合幅2m、長さ30m分ほどになったが、出土した遺物の破片はこの3点のみであった。9層の下層には随所で粗砂層や砂質土層がみられ、それらが互層を成している状態であったので、当該地の地層は、幾たびかの洪水によって土砂が堆積して形成されたものと理解される。9層出土遺物に関しては、標高としてはより上位の、南方のいざれかの地点から流入してきたものと考えられる。

以上のように、9層以下の土層の堆積状況や9層からの遺物出土状態から、9層より下層にまた別の遺構面が存在する兆候は認められなかった。

②遺構

検出した遺構の配置は、図5の調査区遺構配置図に示した。南北方向に長い平行した2本の流路が検出された。

ただし、上層流路は、深さが最大でも20cm程度しか残っておらず、しかも西岸の立上がりは検出されたものの、図5にも見えるように、東岸は削平を受けているらしく遺構の立上がりの斜面は検出されなかった。対応する東岸が検出されなかったという点では、この遺構は「流路」ではなく、池や沼など比較的広い範囲に広がるものであった可能性も考えられなくもない。しかし、後述するようにこの遺構の埋土は北端から南端まで比較的均質な粗砂であることから、沈殿によって粘土質の埋土になりやすい池や沼などではなく、かつてここに水の流れがあったと判断して、「流路」とした。

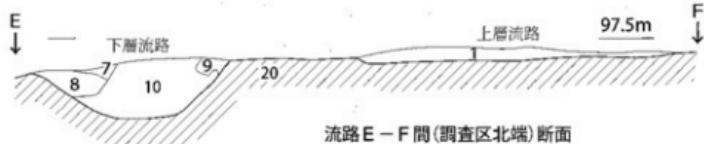
これらの遺構は、図6・図7-9層上面で検出されたもので、試掘調査で知られていた上層流路及び下層流路がこれに当たる。本調査では、上層流路も下層流路も基本的にはこの同一面で検出されたのであるが、調査区南端部での土層断面で上下の切合い関係が確認できた。その状態は、図8として示した流路断面図では、遺構が実際に重なり合っているJ-K間や、層位的に上層から掘り込まれていることが確認できたG-H間の断面図に示した通りである。

図5に見えるように、下層流路は、調査区のほぼ中央をおおよそ南北方向に縦断している。検出

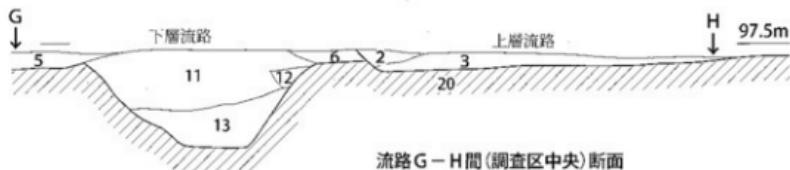
上面での幅 2.1 ~ 3.8 m、深さ 0.6 ~ 1.1 m を測る。検出長は約 30 m である。

底のレベルは安定的ではなく、凹凸が激しくて一様ではない。図 8 として示した断面図では、北端に当たる E-F 間断面での底のレベルが、南端に当たる J-K 間断面での底のレベルより約 15 cm 高くなっている。しかし、図 1 や図 2 にも見えるように、調査地周辺の地形は南が高く北に低くなっていて、この遺構に關しても、上端（遺構の上面）での標高を比較すると、南端より北端の方が低い。遺構の底に関しては隨所に水による浸食を受けているものとして、元は南から北に流れる流路であったと理解したい。

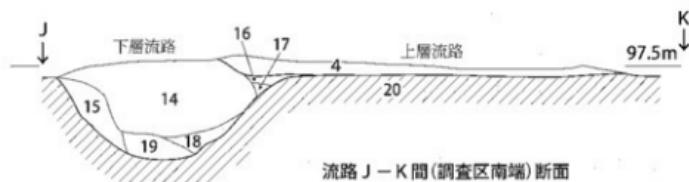
下層流路の埋土は、図 8 の J-K 間断面図に見えるように、一部粘土層（15・18 層）などもあるが、



流路 E-F 間（調査区北端）断面



流路 G-H 間（調査区中央）断面



流路 J-K 間（調査区南端）断面

上層流路埋土

1. 黄白色粗砂
2. 暗灰色粘土混じり砂
3. 黄灰色粘土混じり砂
4. 暗灰色粗砂

下層流路埋土

7. 灰色シルト混じり細砂
8. 暗灰色粘土（有機質を多く含む）
9. 暗灰色粘土（有機質を多く含む）
10. 黄白色粗砂
11. 白黄色粗砂
12. 暗灰色粘土
13. 白灰色粘土混じり砂
14. 白灰色粗砂
15. 暗灰色粘土
16. 灰褐色粗砂
17. 暗灰色粘土
18. 暗灰色粗砂混じり粘土
19. 黄灰色砂礫

下層流路形成後の堆積

5. 灰褐色砂質土
6. 暗褐色砂質土

造構ベース層

20. 暗灰色粘土

0

4 m

図 8 第 4 次調査 流路断面図 (S.= 1/60)

基本的には、粗砂層で構成されている。このことは、この流路が滯水するようなものではなく、一定程度水の流れがあったことを示している。

図5中に示したように、この下層流路の西岸の一箇所に、杭が打ち込まれていた。図18の杭実測図に34として示したもの（18-34と表記、以下同様。）で、図5にも、その出土位置を表した●印の傍らに「34」と表記した。長さ74cmが残存しており、このうち65cmが打ち込まれていた。後述するように、上層流路の西岸には護岸施設の一部とみられる杭が列を成していたが、この（18-34）付近では、これ以外に杭は見られなかった。堤方のない杭であるが故に、この下層流路に伴つて遺構の形成面から打ち込まれたものであるのか、あるいは、さらに上層から全く別の意図をもつて打ち込まれたものであるのかも、検証ができなかった。打ち込まれた位置や深さなどからみれば、下層流路に伴うと考えるのが状況としては自然あるが、その性格は不明である。

埋土中からは、少量ながら土器が出土した。それらの年代の下限は弥生時代後期であるとみられるので、下層流路も当該期までに形成されたと考えられる。

上層流路は、下層流路の東に平行する位置で検出した。この項の冒頭に記したように、上層流路は、流路の西岸斜面が深さ最大で20cm程度が残存しただけで、東岸は遺構の斜面立ち上がりとしては検出されなかった。その状態は、図8の流路断面図に示したように、西側で僅かに遺構の立ち上がりの斜面が見えるが東側は底のレベルで地盤となる暗灰色粘土層に直線的に繋がっていたものである。流路の埋土として認識された土層は、粗砂か粘土混じり砂であった。このように遺構の東側は削平を受けた状態であったので、流路の幅は不明であるが、埋土分布範囲の状態から、4m以上であったと考えられる。

この上層流路について特徴的であったのは、僅かな高さが残存した西岸付近で、必ずしも規則的では無いが列状に並んで打ち込まれた状態の杭を検出したことである。その配置については、図5の調査区遺構配置図に●印で模式的に示した。

これらの杭は、その検出位置から見ても上層流路西岸の護岸施設の一部を成していたと考えられる。ただし、それにしてはあまりにも杭相互の間隔が広く、また、横木などの他の施設も見られなかった。このことは、上記のように上層流路自体の残存状態が悪いことからみて、多くは削平を受けた結果と考えられる。検出した杭は、偶然比較的深く打ち込まれていたために、その先端部分などが残存したものと理解される。

杭は、直径3~5cmの丸太杭が主体であるが、僅かに割り木を用いたものがある。また、一部の例外を除いて、先端が鋭利な刃物で削られて尖っている。

一部の例外とは、先端が折りとられた状態のままで打ち込まれた（17-27）や、僅かな加工が施されただけの（13-6）・（18-31）などである。（17-27）や（13-6）は杭の直径が3~4cm足らずの細い枝様の木であるので、護岸杭施工現場において急な不足に対応するためにその場で調達したというようなことがあったかにも思われる。一方で、（18-31）は直径が5cmを

超える比較的太い杭で、一定の形状を作り出すために側面を削り出している。その結果、杭は面取が施されているような外観になっている。これほどの加工をしているにも関わらず、先端部分を尖らせるための加工を行っていない。このことは、本来は杭として製作されたのではない木材を、杭に流用した可能性も考えられるが、いずれにしても、雑駁な仕事ぶりであるとの印象を拭えない。

検出した杭を概観すれば、長さ、径のほか樹種も様々であることが判る。それらのなかには、極端に細長いものや屈曲したものがあり、材質そのものが軟質でとても杭材に相応しいとは思えない(14-11)なども混在している。護岸杭施工現場では、相当数の杭が必要であったとみられ、周辺部から搔き集めた感がする。このことは先の「雑駁な仕事ぶり」とも関連するのかもしれない。

さて、これらの杭のなかには先端が尖っていないものが混在していることを前記した。そのような杭の存在から、杭を打ち込んだ当時の地盤の状態をある程度推測することができる。つまり、当時の地盤は、杭を打ち込むに際してあまり硬くない、軟質な土壌であったと理解される。「調査地の基本層序」の項でも記したように、遺構がベースとしている図6・図7-9層は乾けば硬く縮る粘土層であるが、検出時には水分を多く含んでいて歩くことも難儀するほど軟質であった。おそらく護岸杭施工当時においても同様であったと思われる。

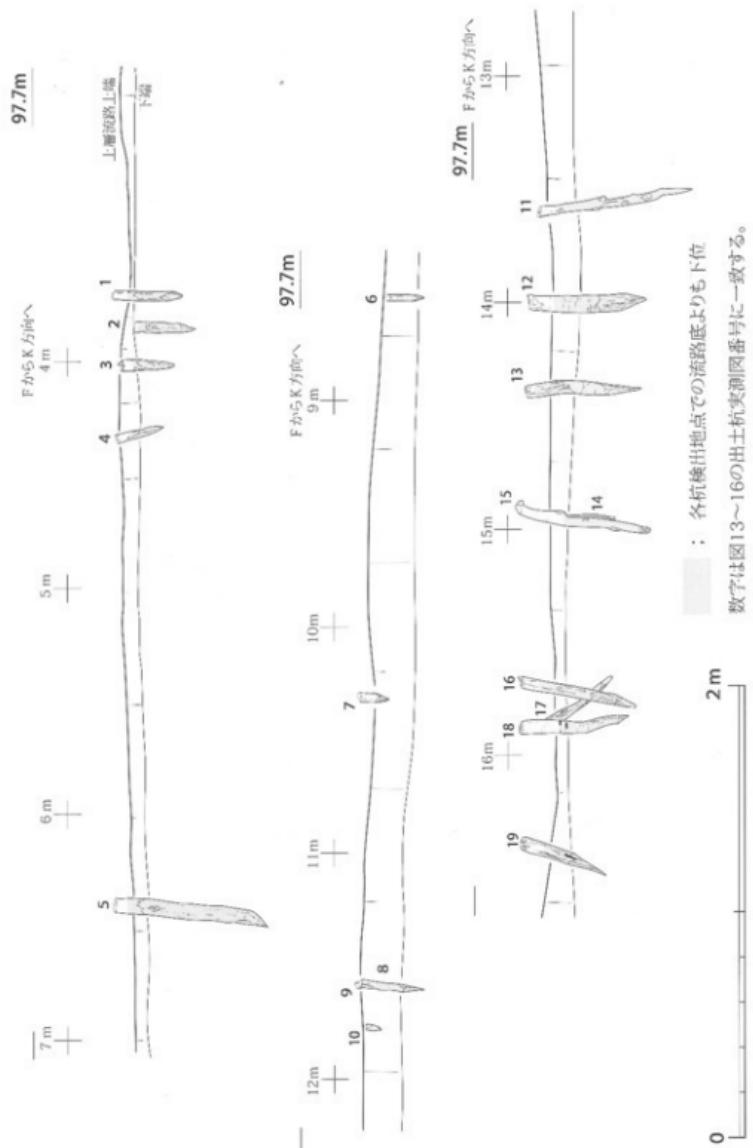
このような軟質な土壌に杭を打ち込む場合、できる限り深く打ち込むことが杭の自立を保つうえで肝要であろう。そのためには、長い杭が必要である。今回検出した杭を見ると、長いものは1mを越えているが、短いものは10cm足らずである。現状での長さの差異は、たまたま残存した長さの差異であるから、元の長さとは必ずしも関係ないだろうが、打ち込まれた杭の深さには違いがある。すなわち、検出面から深く打ち込まれている杭がある一方で、極浅くしか打ち込まれていない杭も混在している状況があった。

図9・図10は、上層流路に打ち込まれた杭の状態を示す立面図である。図中、各杭が打ち込まれていた地点における遺構底よりも下位に当たる部分にトーンを入れた。つまり、杭下半のトーンは、その杭が打ち込まれていた深さを示している。

これを見ると、図10の25のように深く打ち込まれて安定感のあるものも少なくないが、図9の6・7・10や、図10の20・27・30のように、この深さまでしか打ち込まれていないとすれば、どうてい自立することが不可能であるものも多い。このほか、15~20cm程度が打ち込まれていたものについても、上記のような軟弱な地盤において杭が自立したのか疑問である。

上層流路の埋土は、灰色の粗砂で、杭が打ち込まれた地盤は暗灰色粘土であった。土質の違いが明瞭で、両者の識別は容易であったので、その面の検出に際して不用意に掘り下げ過ぎた可能性は低い。

このような状態を整合的に理解することは難しいが、流路の底に粗砂などが堆積した後も護岸の補修のために、新たに杭を打ち込んだとすれば、上のような検出状態になることも考えられる。また、この地点が流路であるので、杭が打ち込まれた後にも地盤が流水によって削り流されていたと



; 各坑検出地点での流路底よりも下位
数字は図13～16の出土坑検査図番号に一致する。

図9 第4次調査 上層流路遷岸坑 立面図1 (S.=1/25)

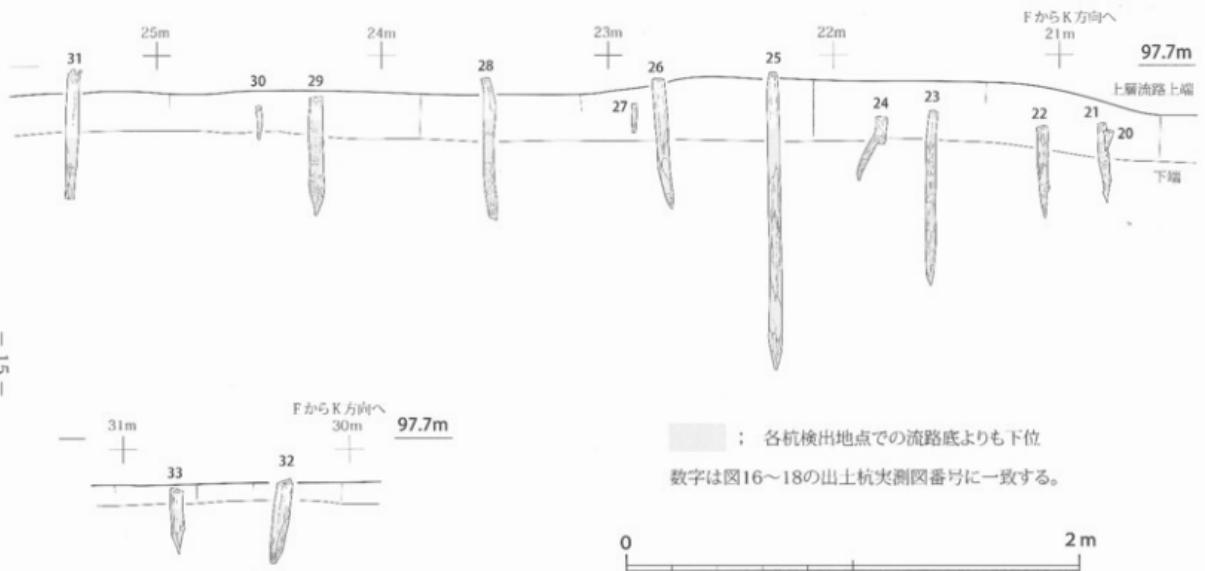


図10 第4次調査 上層流路護岸杭 立面図2 (S.=1/25)

すれば、やはりこのような検出状態になりえようか。

そのほかにもいくらかの可能性が想定できるかもしれないが、現状ではそのいずれとも決しがたい。ただし、護岸杭は、杭だけでは護岸のための用に立たず、横木などが必要であるが、ここではそれらが検出されなかったことがある。そのことは、護岸施設としては上半の相当な部分を失っていることを示している。この場合には、例えば大雨時に水位を増した流水が、流路の壁面や底などを削りつつ、杭によって押さえられていただけの横木をも巻き込んで、これをらを下流に押し流していく事態などが想定される。そうであれば、杭が自立するほどの深さまでは打ち込まれていないかに見えた地盤については、杭を残してその上面が削り流されたと思われる。

上層流路は、深さ 20cm 程度しか残ってなかつたので、その上部の相当な部分が削平を受けていることは明らかであるが、杭の残存状況から見れば、遺構の底も本来は現在のそれよりもさらに高かったと考えられよう。

上層流路の埋土中からは、上記の杭以外にも加工痕跡のある木片若干のほか、僅かな量の土器片が出土した。土器は布留式後半までの占式土師器である。遺構の形成時期も当該期と考えられる。このことは、層位的に上・下層流路として認識された遺構の先後関係とも合致している。

③遺物

出土遺物は、土器と木器がある。土器は、コンテナ約 3 箱分が出上した。その内、実測が可能な 30 個体を抽出して、図 11・12 に掲げた。木器は、すべて遺構に伴つて検出した木杭である。それらの実測図は図 13～18 に掲げた。

図 11・12 の出土上器については、その出土層位ごとにレイアウトした。個々の遺物の詳細については、出土上器観察表を本文末尾（28～33 頁）に付したので参考されたい。ここでは、特徴的な事柄について見ていく。

図 11 の上段には、図 6～8 層出土土器を掲げた。この包含層は、層位的には遺構検出面である 9 層の直上に堆積していた土層である。粗砂層であった。このような層位は、遺構の形成時期を考える際に一定の材料を提供するものである。（11-1）は、分割成形されたタタキ甕である。甕（11-4）も、外面にタタキ痕跡が残っている。これらは弥生時代後期のものであろう。（11-4）は、椀形の杯部を持つ高杯である。古墳時代に下るものかもしれない。

図 11 の中段には、図 6～9 層出土物上器を掲げた。9 層は、今次調査で検出した流路の遺構基盤となる、粘土層である。同層からの出土量は極めて少ないので遺構の形成時期を考えるうえでは貴重である。ただし全体形の判る資料がないために、細別時期の特定は難しい状況ではある。

（11-7）は、体部から下方に突出する底部である。甕か壺か特定できない。いずれにしても、その形態から見れば、弥生時代後期のものとみられる。（11-8）は、外面をケズリ調整している。いわゆる四分型甕である。弥生中期前半のものとみられる。

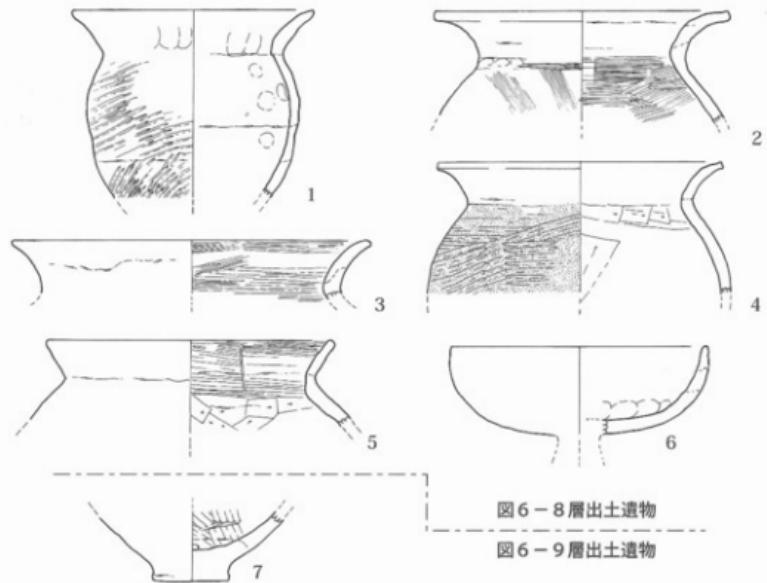


図6-8層出土遺物

図6-9層出土遺物

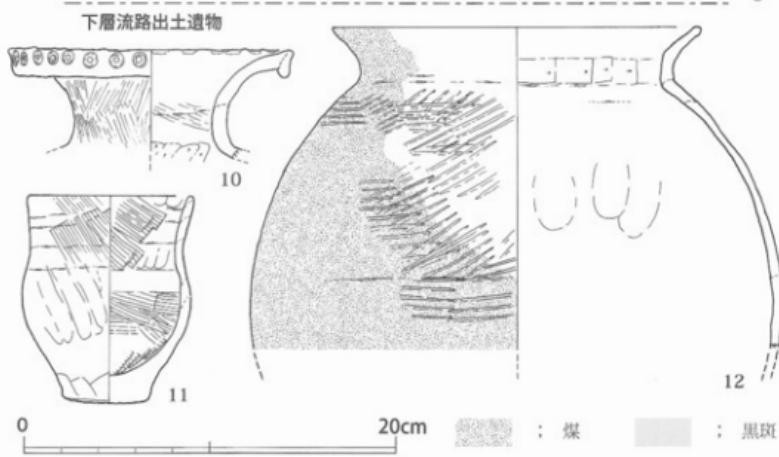
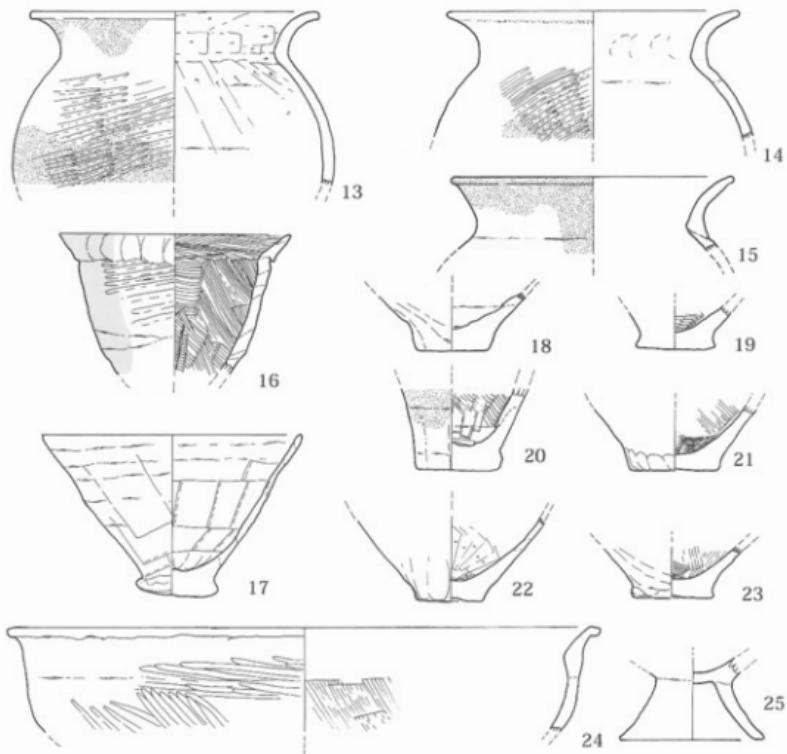


図11 第4次調査 出土土器1 (S. = 1/3)



下層流路出土遺物

上層流路出土遺物

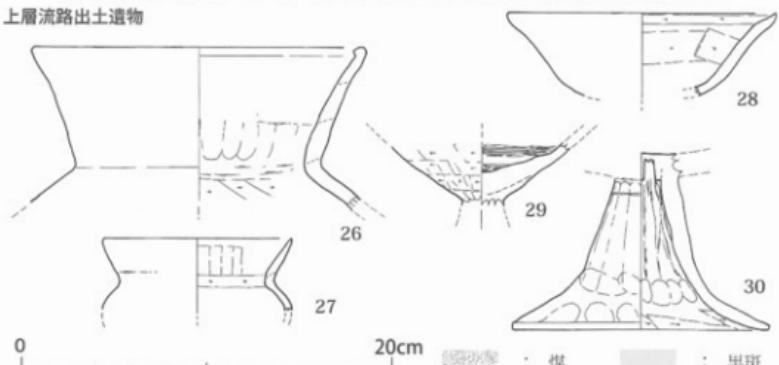


図12 第4次調査 出土土器2 (S.=1/3)

■ 煤 ■ 黒斑

図 11 の下段から図 12 上段には、下層流路の埋土中から出土した遺物を示した。時期の特定には難しい破片も多いが、その中で、小形長頸壺（11-11）は口頸部の 1/2 程を欠くものの、体部から底部にかけてはほぼ残存していた。残存率がよい遺物としてはこのほか（12-17）がある。壺を分割成形する際に、基底部となる部分をそのまま直口口縁の鉢としたものである。内外面は板ナデとしたが、本来的にはハケ工具と同等の工具で器壁調整されたものと思われる。

（11-11）と（11-17）は、破片資料が多い下層流路出土品の中で、いずれも比較的完形に近いものであるから、特に遺構形成時期に近いものといえよう。小形長頸壺（11-11）は弥生後期後半に特徴的な遺物であり、直口口縁鉢（11-17）も同様の時期とみて矛盾はない。

ただ、下層流路埋土から出土遺物のなかには、垂下口縁の広口壺（11-10）などもみられる。口縁部に竹管文を施して加飾するもので、中期のものであろう。口縁部の一部を欠いているが、頸部以上が残っている。また、（12-24）は、口縁部の 1/4 程が残存した小破片であるために、やはり器形の全体像が判りにくいが、大形鉢の最終段階に位置するものとみらえる。そうであれば、後期でも前半のものとなろう。

このように、下層流路出土遺物には、時期が一定程度特定できるものでも、時間幅がある。そのことは流路という遺構の性格上むしろ当然のこととも言える。その中で、最も新しい時期を探るならば、遺構が最終的に機能した時期は、後期後半であると言えよう。

図 12 の下段には、上層流路出土遺物を示した。5 個体が図化可能であった。これららのうち、ある程度時期の特定の手がかりになるものとして、小形丸底壺（12-27）が挙げられる。図示しているとおり、完形にはほど遠く、口縁部も全体の 1/5 程度の残存であったが、残存部分からみれば、扁球形の体部をもち、口縁部の高さが、器高の 1/3 ~ 1/4 程度になったものであろう。このような器形の小形丸底壺は、古布留式でも後半段階にみられる。

一方、その他の土器は、細別時期の特定が難しい。（12-26）は、短頸直口壺の口頸部であろう。短頸直口壺は概ね布留式を通じて見られる器種である。高杯（12-30）は、脚部だけの残存である。このような形態をする脚台は、やはり布留式を通じて見られる。このほか、高杯（12-28）・（12-29）は、いずれも細片であるか器形がやや特異で、編年的な位置づけを考えることは困難である。

このようなことで、上層流路出土遺物は、（12-26）・（12-27）・（12-28）をもってみると、おおよそ布留式の後半期と見て大過ない。あえて、細別時期を言うならば、それぞれの細部の状態などから、布留 3 式（寺沢 1986）に併行すると思われるが、個体数が少ないとあって、明確ではない。

次に、図 13 ~ 18 に、出土した杭の実測図を示した。（18-34）を除く 33 個体は、上層流路に伴って検出したもので、図 5 も示しているように、（18-34）のみがやや検出地点が異なっている。実測図のスケールは基本的に 1/4 に統一したが、寸法の大きかった（17-25）は、やむを得ず 1/6 とした。また図中トーンで示しているのは、樹皮が残存した部分である。実測図の個々

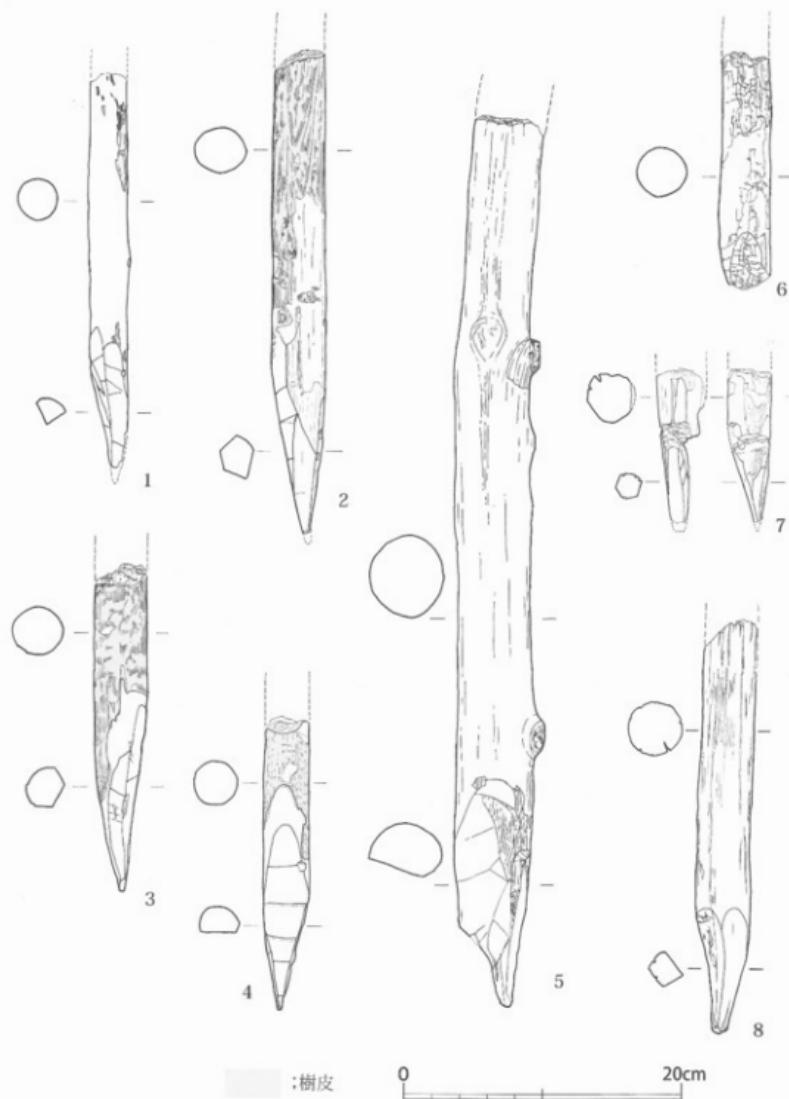


図13 第4次調査 出土杭1 (S. = 1/4)

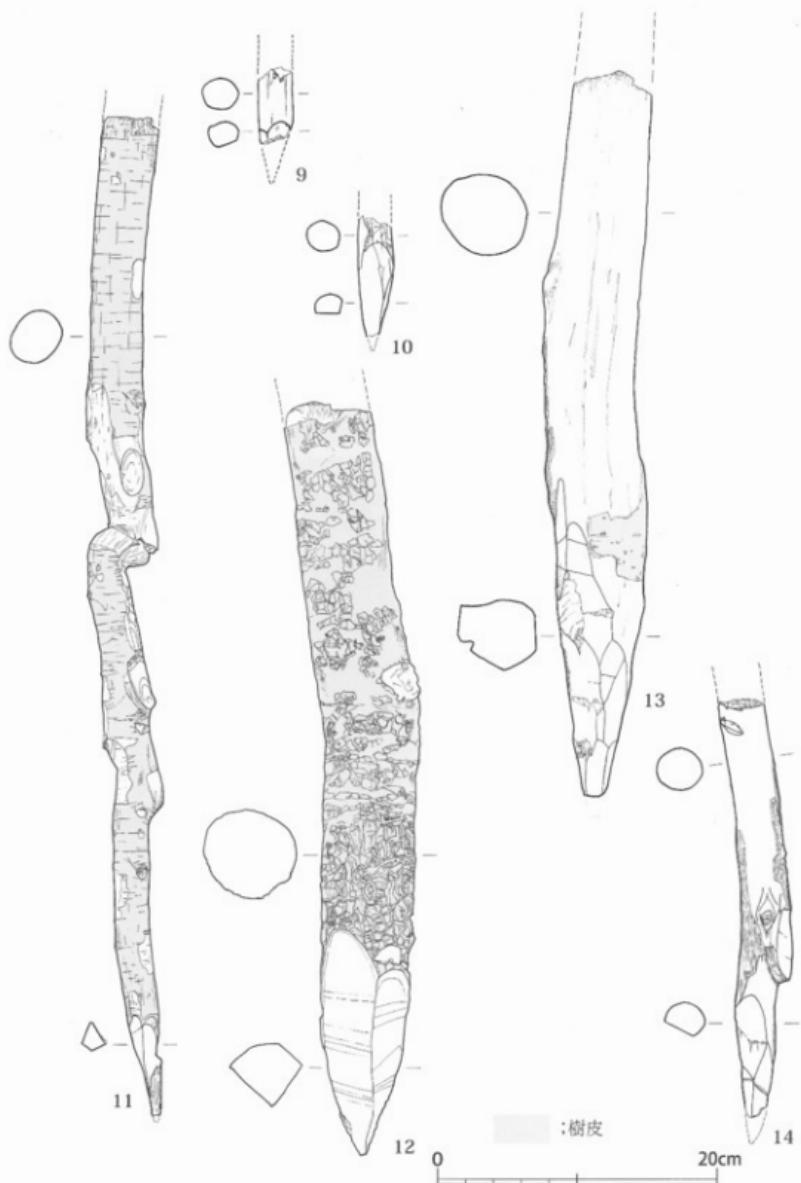


図14 第4次調査 出土杭2 (S. = 1/4)

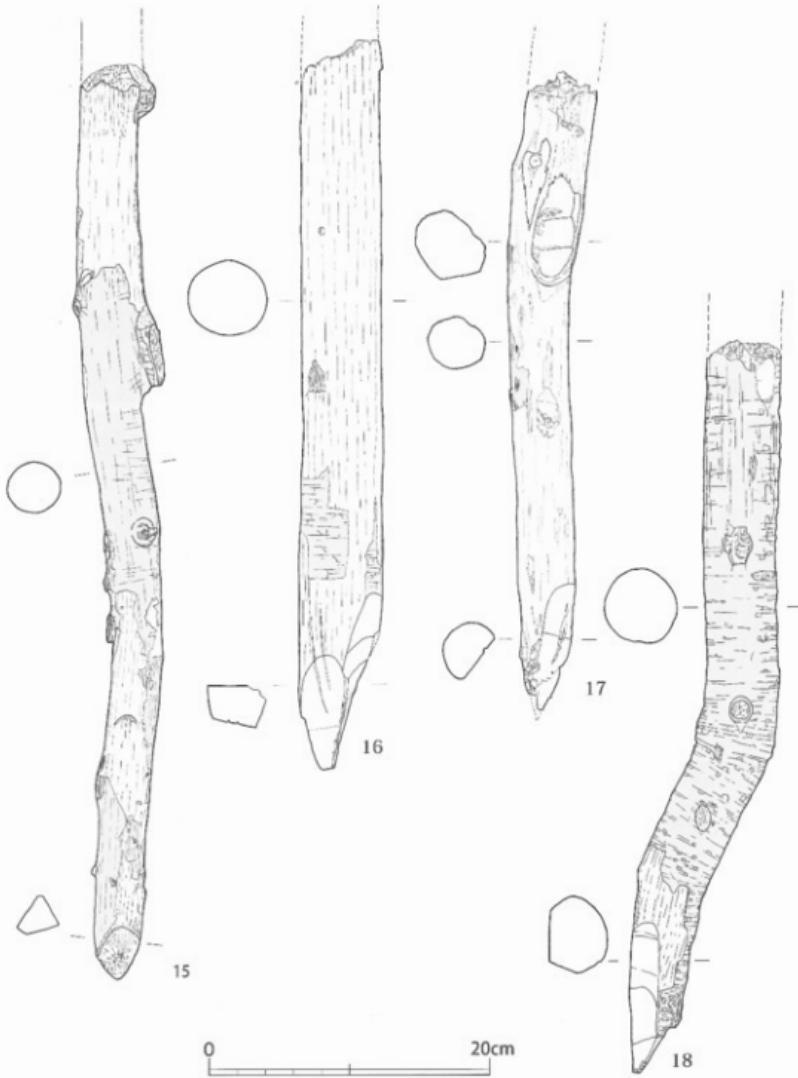


図15 第4次調査 出土杭3 (S. = 1/4)

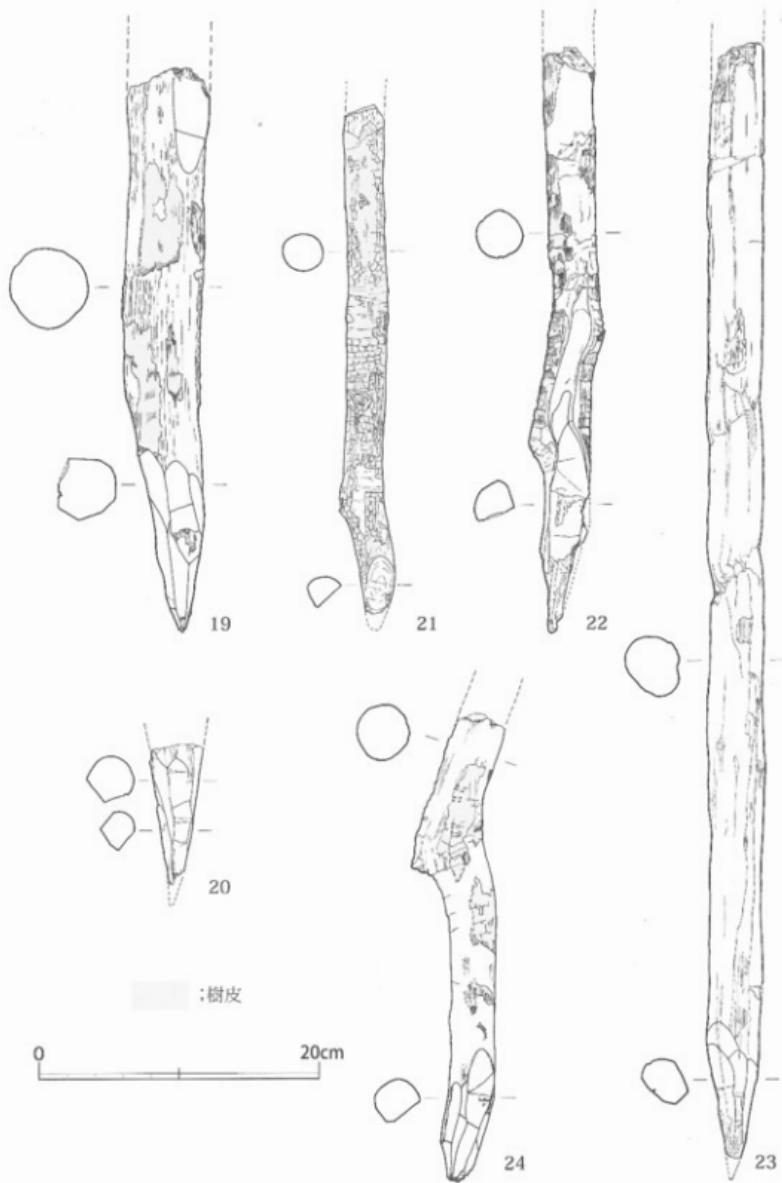


図16 第4次調査 出土杭4 (S. = 1/4)

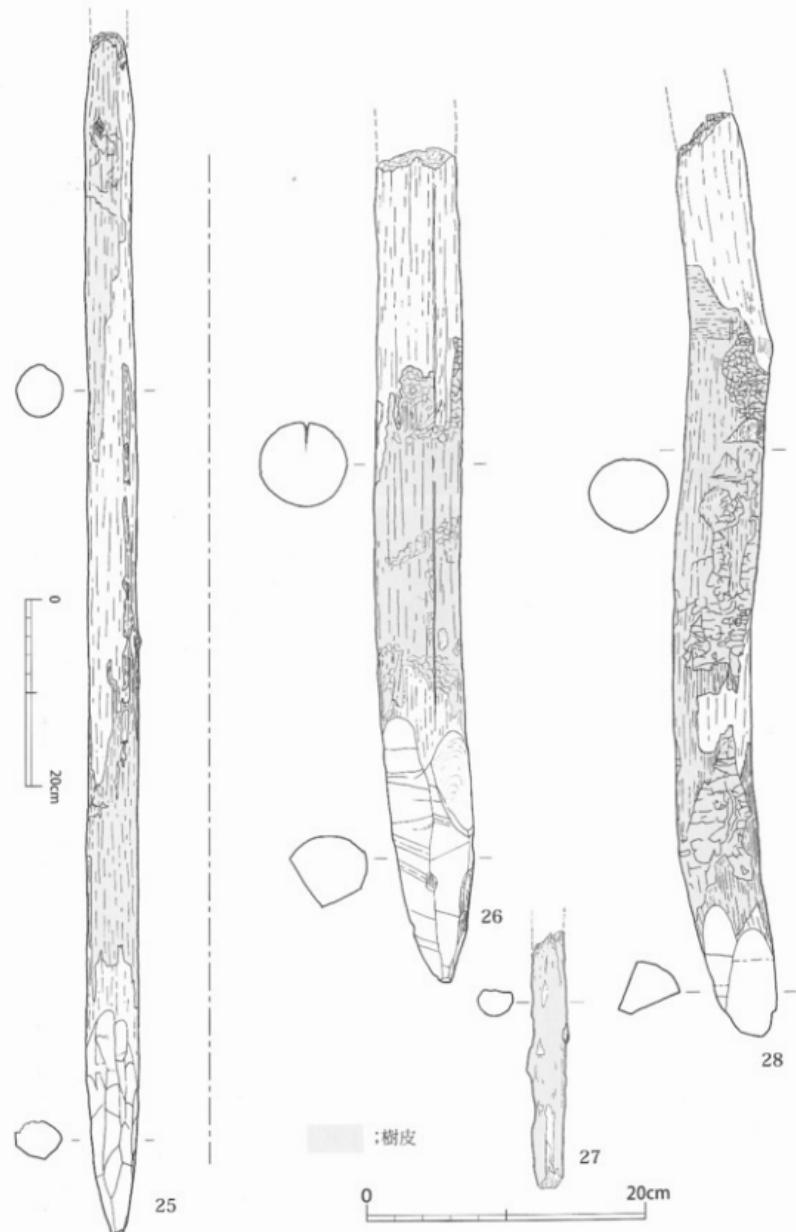


図17 第4次調査 出土杭5 (S.=1/4 但し25はS.=1/6)

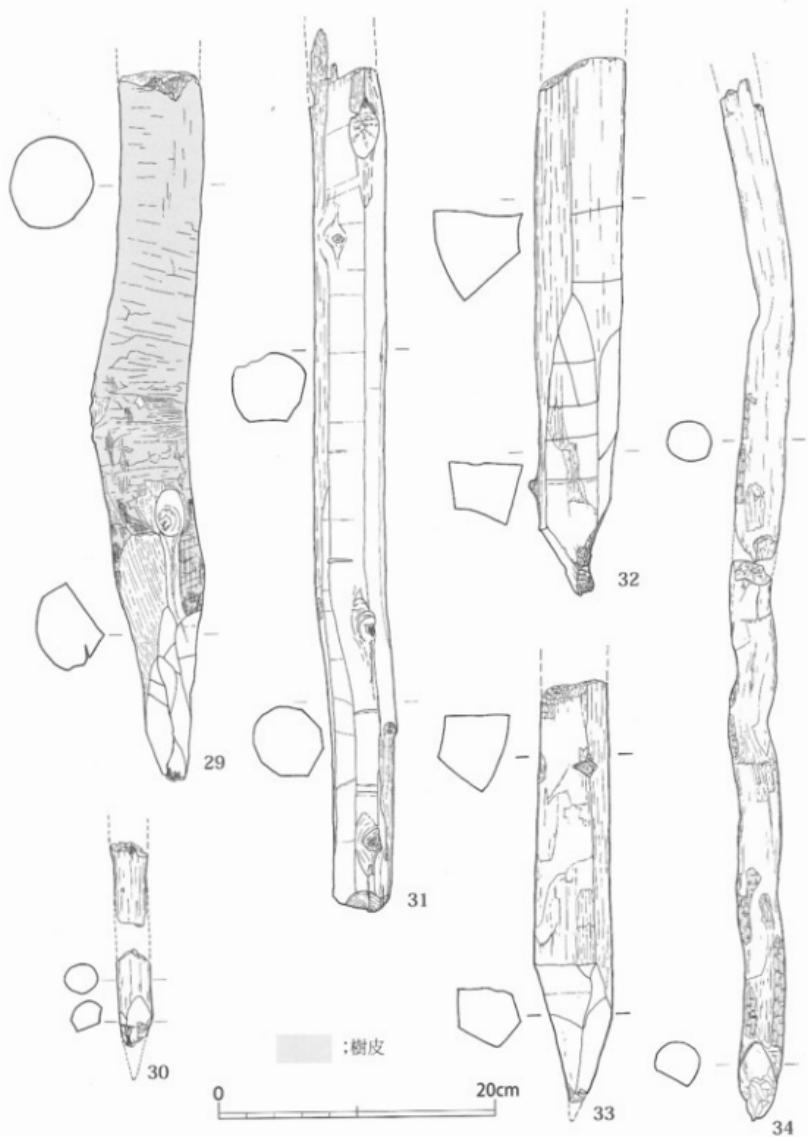


図18 第4次調査 出土杭6 (S. = 1/4)

の番号は、図5および図9・10の遺物番号と対応させている。

上層流路に伴った、(13-1)～(18-34)の図上でのレイアウトは各々を検出した地点順におおよそ北から順次配列したものである。このように配列した実測図を一瞥すれば、出土した杭が太さ、長さにおいて大小様々なものが混在していることが明らかである。

長さに関して言えば、偶然残存しただけのことであるから、様々な長さの杭が混じるのはむしろ当然とみられるかもしれない。しかしながら、特に残存長が極端に短い(13-6)・(13-7)・(14-9)・(14-10)・(16-20)・(17-27)・(18-30)などは、検出面下の長さもあまりに短いので、検出面に打ち込まれたとすれば、とうてい自立するものではない。このような残存長が短い杭については、単に偶然に短くなってしまっただけではなく、「遺構」の項でも前述したように、杭として打ち込まれた際に、その他の杭とは取り扱いに違いがあった可能性も考えられる。つまり、これらの杭の存在は、流路に土砂が堆積したのちも、補修などが行われてた可能性なども考えられるが、実態は明確ではない。

検出した木杭は、このような太さや残存長だけではなく、樹種や形状についても様々な物が存在していることが判る。

樹種については、専門家による鑑定を経ていないので各個別に提示することはできないが、樹皮の外観から、松材とみられる(14-12)や桜材とみられる(15-18)が存在している。

形状は、多くは真っ直ぐにのびる通有のものであるが、(14-11)は、残存部中央付近で屈曲点があり、この部分は特に強度的に弱い。(15-18)・(16-24)は全体の屈曲が顕著である。また、ほとんどの杭は、直径3～5cmの丸太材であるが、(18-32)・(18-33)は割り木である。(18-31)は、先端が通有のように尖らされていないのに、上部に至るまで面取風の加工が行われている。

以上のように、検出した杭は、規格性が乏しく雑多な木材が収集された感がある。

4.まとめ

以上、今出遺跡における第1次調査と第4次調査の成果を報告した。

第1次調査では、結果的に幅1m、長さ約50mのトレンチを掘削したことになったが、遺構は検出されず、土層の堆積状態から、調査地の東半がかつては池か沼地であったことが考えられた。

第4次調査では、上下層の2本の流路を検出した。その内、上層流路は、護岸杭を伴うものであった。流路の形成時期は、下層流路は弥生時代後期後半頃、上層流路は古墳時代前期後半から中期前葉ころとみられる。

第4次調査は、当該遺跡において人為的な遺構が初めて検出された点で意義深い。遺構の密度は現状では高いとはいえないが、今後とも周辺の開発・調査には留意が必要である。

〈参考文献〉

- 秋山日出雄・網干善教 1959 「室大墓」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 18 冊)
- 川上洋一ほか 2004 「鴨都波遺跡第 20 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2003 年』第 2 分冊
- 木許 守 1990 「中西遺跡—第 2 次発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第 9 集)
- 1991 「中西遺跡—第 3 次発掘調査報告一」(『御所市文化財調査報告書』第 10 集)
- 1995 「名柄 4 次発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第 19 集)
- 2005 「中西遺跡—第 7 次発掘調査報告一」(『御所市文化財調査報告書』第 29 集)
- 木許 守編 1996 「室宮山古墳範囲確認調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第 20 集)
- 阪本普通 2002 「鴨都波 16 次発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第 27 集)
- 関川尚功 1989 「御所市 室大墓古墳外堤部 発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1988 年度』第 2 分冊
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 49 冊)
- 坂 靖 1996 「南郷遺跡群！」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 69 冊)
- 藤田和尊 1991 「奈良県御所市名柄遺跡の調査」『日本考古学年報』42
- 1994 「橘原遺跡！」(『御所市文化財調査報告書』第 17 集)
- 藤田和尊・木許 守 2001 「鴨都波 1 号墳 調査概報」(学生社)

出土土器 観察表

図-遺物 番号 器種 出土場所	形態と調整	・口縁部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	胎土						色調	備考
				長石	石英	角閃石	雲母	チヤート	赤褐色		
11-1 甕 図6-8層	口径 12.8cm (残存 1/5 からの回転復原) 残存高 10.0cm	口縁部は、体部から大きく屈曲して外上方に開いている。口縁端部は丸い。 ・外面 ナデおよび指頭による押圧 内面 ナデ ・外面 タタキ (右上がり) 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・-	良好	M 1	M 2	M 2	S 3	M 1	0	・白灰色 ・暗黄褐色 ・黒灰色	
11-2 甕 図6-8層	口径 15.6cm (残存 1/11 からの回転復原) 残存高 5.7cm 体部から大きく屈曲して開く口縁部は、端部近くでさらに水平方向に広がっている。口縁端部は外傾する面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ハケ 内面 ハケ ・-	良好	L 1	M 1 L 2	M 2	S 1	L 1	0	・黄灰色 ・暗灰色 ・黃灰色		
11-3 甕 図6-8層	口径 19.0cm (残存 1/9 からの回転復原) 残存高 3.2cm 口縁部は僅かに外反しつつ、外上方に広がっている。口縁端部は丸い。 ・外面 ナデ 内面 ハケ (9条/cm) ・-	良好	M 2	L 1	S 2	S 3	M 1	0	・淡灰褐色 ・淡灰褐色 ・濃灰色		
11-4 甕 図6-8層	口径 15.2cm (頸部残存 1/3 からの回転復原) 残存高 7.0cm 口縁部は、体部から比較的明瞭に屈曲して外上方に広がっている。口縁端部は外傾する面をなし、端面中央は強いヨコナデによって、僅かに瘤む四線になっている。瘤面上端は、僅かに上方に突出している。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 タタキ (水平から右上がり) 内面 ケズリ後ナデ ・-	やや軟	L 2	L 3	S 2	S 3	(S) 3	L 1	0	・黒灰色 ・赤褐色 ・赤褐色	体部外面に煤
11-5 甕 図6-8層	口径 15.2cm (残存 1/9 からの回転復原) 残存高 4.6cm 口縁部は、体部から明瞭に屈曲して外上方に広がっている。口縁端部は外傾する面を成すが、端面の上下端の稜線はまったく明瞭ではなく丸くなっている。 ・外面 ナデ 内面 ヨコ方向ハケ ・外面 ナデ 内面 ヘラケズリ ・-	やや軟	0	L 1 M 3	M 1	S 1	L 1	0	・淡赤灰色 ・淡赤灰色 ・濃灰色		
11-6 高杯 図6-8層	口径 13.6cm (残存 1/8 からの回転復原) 残存高 4.6cm 杯口縁部は、杯底部から緩やかに屈曲して上方にのびている。口縁端部は丸い。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・-	軟	S 2	S 2	M 1 S 4	S 2	0	M 3	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色		

図-遺物 番号 器種 出土場所	形態と調査 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚台部) ・	焼成	胎土						色調	備考
			長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑		
11-7 底部 図6-9層	底部径 4.6cm 残存高 3.7cm 底部は小さく下方に突出する平底である。 ・ ・ ・外側 ナデ 内側 不定方向ハケ	良好	M ₂	0	S ₄	S ₃	0	0	・暗灰褐色 ・灰褐色 ・灰褐色	底部内面中央に 深7mmの粘土 粒が貼付いてい る。
11-8 甕 図6-9層	口径 11.6cm (残存 1/5 からの回転復原) 残存高 3.3cm 口縁部は、体部から大きく屈曲して、ほぼ水平に 外方に開いていている。口縁端部は丸い。 ・ナデ ・ナデ ・ケズリ ・ナデ ・	良好	M ₁	L ₁	S ₃	○ ₃	0	0	・暗褐色 ・暗褐色 ・暗褐色	
11-9 甕 図6-9層	口径 16.0cm (残存 1/9 からの回転復原) 残存高 4.6cm 口縁部は、体部から屈曲して外上方に開いている。 口縁端部は丸い。 ・外側 ナデ 内側 ナデ ・外側 ハケ (4条/cm) 内側 ハケ (7条/cm) ・	良好	0	L ₁	S ₁	○ ₂	0	0	・淡灰褐色 ・灰褐色 ・暗灰褐色	
11-10 甕 下層流路	口径 14.8cm 残存高 5.8cm 頸部はほぼ垂直に立ち上ったのち、屈曲して、 外反しつつ外方に開き口縁部となっている。口縁 部は、粘土帯を貼付けた垂下口縁になっている。口 縁端面には竹管文が施されている。 ・口縁部ナデ。頸部はタテ方向ハケ (4条/cm) ハケのちナデ (8条/cm) ・ ・	良好	L ₂	L ₁	S ₂	○ ₂	L ₁	0	・淡赤褐色 ・淡灰褐色 ・淡赤褐色	口頸部の8割以 上が残存
11-11 小形長頸甕 下層流路	口径 8.7cm 高さ 11.0cm 口縁部は僅かに外方に開きつつ直線的に上方にの びている。口縁端部は丸い。体部は中央よりやや上 位に最大径がある。底部は下方に突出する平底であ る。 ・外側 ハケ (6条/cm) 内側 ハケ (6条/cm) およびナデ ・外側 ナデ 内側 ハケ (6条/cm) ・外側 ヘラ状工具による押圧 内側蜘蛛の巣状ハケ (6条/cm)	良好	M ₃	L ₁	M ₃	M ₂	0	0	・淡赤褐色 ・小褐色 ・淡赤褐色	
11-12 甕 下層流路	口径 19.6cm (残存 1/4 からの回転復原) 残存高 17.2cm 体部から屈曲した口縁部はほぼ上方に立ち上ったのち、外上方に開いている。口縁端部は丸い。体 部最大径は体部高の中央付近にあるらしい。 ・外側 ナデ 内側 ナデおよび下半はヨコ方向にヘラケズリ ・外側 タタキ 内側 ナデおよび指頭による押圧 ・	良好	M ₁	M ₁	M ₃	M ₃	L ₁	0	・赤褐色 ・濃灰色 ・淡褐色	外面に煤が付着 している。

図一 番号 器種 出土場所	形態と調整	口縁部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	胎土						色調	備考
				磨石	石英	角閃石	雲母	チャコート	その他		
12-13 甕 下層流路	口径 15.2cm (残存 1/4 からの回転復原) 残存高 9.2cm 体部から屈曲した口縁部は、緩やかに外反しながら外上方に広がっている。口縁端部は丸い。体部最大径は体部高の上半にあるらしい。 ・外面 ナデ 内面 ヘラケズリおよびナデ ・外面 タタキ 内面 ヘラケズリのちナデ ・-	良好	M 1 I 1	M 2 I 2	S 2 I 2	L 2 I 2	0	0	0	・灰褐色 ・黄灰褐色 ・黄灰褐色	外面に煤
12-14 甕 下層流路	口径 15.0cm (残存 1/10 からの回転復原) 残存高 6.9cm 体部から屈曲した口縁部は、上方に立ち上がったのち、中位で変化点をもって外上方に広がっている。口縁端部は丸い。 ・外面 ナデ 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・外面 タタキ 内面 ナデ ・-	良好	S 1 I 2	M 1 I 2	S 2 I 2	⑤ 2	0	0	0	・黄灰色 ・黄灰色 ・黄灰色	外面に煤
12-15 甕 下層流路	口径 15.0cm (残存 1/3 からの回転復原) 残存高 3.3cm 体部から屈曲した口縁部は、外反気味に外上方にのびて開いている。口縁端部は丸く仕上げられているが、この時の強いヨコナデで、僅かに下方に肥厚している。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・- ・-	良好	M 1 I 2	① 2	M 3 I 2	S 1 I 2	0	0	0	・黄灰色 ・淡赤灰色 ・淡黄灰色	外面に煤
12-16 鉢 下層流路	口径 12.4cm (残存 1/2 からの回転復原) 残存高 7.4cm 体部は僅かに内壇しつつ上方にのびている。口縁部は体部から屈曲して外上方に開いている。内面での体部と口縁部の境界になる後は比較的明瞭で、外側では粘土帶を貼付けた痕跡が明確に残っている。 ・外面 指頭による押圧 内面 ハケ (7 条/cm) ・外面 タタキのちナデ 内面 ハケ (4 条/cm) ・-	良好	S 2 I 2	M 2 I 2	S 2 I 2	S 2 I 2	0	0	0	・暗黄灰色 ・黄灰色 ・濃灰色	黒斑
12-17 鉢 下層流路	口径 14.0cm (残存 1/3 からの回転復原) 器高 8.5cm 体部は直線的に外上方にのびて口縁部に繋がっている。口縁部は屈曲してごく僅かに外方に広がっている。口縁端部は丸い。底部は突出する平底であるが、底面が平ではなく、凸面になっているので、正置したときに安定しない。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 板ナデ (原体幅 2.9cm) 内面 板ナデ ・外面 指頭による押圧 内面 板ナデ・ナデ	良好	S 3 I 2	L 2 I 2	S 2 I 2	⑤ 2 I 2	L 1 I 1	L 1 I 1	0	・黄灰色 ・淡灰褐色 ・淡赤褐色	

図一遺物 番号 器種 出土場所	形態と調査 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚台部)	焼成	胎土						色調	備考
			長石	石英	角閃石	雲母	チャコート	赤色斑		
12-18 底部 下層流路	底部径 3.8cm 残存高 3.1cm 要底部か。体部から下方に突出する平底の底部である。 ・一 ・一 ・外面 ナデ 内面 未調整	良好	M I L 2	① M 2	M 2	⑤ 2	M I	0	・淡赤褐色 ・淡赤灰色 ・淡灰色	
12-19 底部 下層流路	底部径 長径 4.0cm 短径 3.4cm 残存高 2.4cm 要底部か。体部から下方に突出する平底の底部である。体部と底部の境界に強いナデが施されて、底部下端が外方に僅かに肥厚している。 ・一 ・一 ・外面 ナデ 内面 蜘蛛の巣状ハケ	良好	M I L 1	L 1	M 3	M ⑤ 2	L 1	0	・淡赤灰色 ・淡赤褐色 ・淡灰色	
12-20 棗底部 下層流路	底部径 4.8cm 残存高 4.3cm 要底部。体部から僅かに屈曲して下方に突出する平底の底部である。隔壁が厚く、残存部分はいずれも腫れぼったい感じがする。 ・一 ・一 ・外面 ナデ 内面 タテ方向およびナメ方向のハケ。	良好	L I L 1	① S 2	S 2	⑤ 2	0	0	・淡赤褐色 ・淡灰褐色 ・淡灰褐色	黒斑
12-21 底部 下層流路	底部径 4.8cm 残存高 3.5cm 体部から屈曲して下方に突出する平底の底部である。 ・一 ・一 ・外面 ナデおよび指頭による押圧 内面 蜘蛛の巣状ハケ	良好	O 1	M ⑤ 3	S 1	M 5 2	M 2	0	・淡赤灰色 ・淡灰褐色 ・淡灰褐色	内面に黒斑
12-22 底部 下層流路	底部径 3.6cm 残存高 4.2cm 体部から屈曲して下方に突出する平底の底部である。底部は粘土紐を輪状にして形成しているもので、底部外面中央が上げ底風に窪んでいる。 ・一 ・一 ・外面 ナデおよび指頭による押圧 内面 蜘蛛の巣状の板ナデ	良好	M 2	S 1	S 1	S 3	L 1 M 2	0	・淡灰褐色 ・灰褐色 ・淡灰褐色	
12-23 底部 下層流路	底部径 4.1cm 残存高 2.7cm 体部から屈曲して下方に突出する平底の底部である。底部は粘土紐を輪状にして形成しているもので、底部外面中央が上げ底風に僅かに窪んでいる。 ・一 ・一 ・外面 ナデ 内面 蜘蛛の巣状ハケ	良好	M 1	O 2	M ③ 3	O 3	0	0	・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・黒灰色	

回一遺物 番号 器種 出土場所	形態と調整	焼成	胎土						色調	備考
			墨石	石炭	角閃石	雲母	チャート	赤色斑		
12-24 鉢か 下層流路	口径 30.8cm (残存 1/6 からの回転復原) 残存高 5.6cm 口縁部と体部の境界は極めて不明瞭な様になって いる。口縁部は体部から屈曲して、僅かに外反しつ つ上方にのびている。口縁端部は、外方に強く屈曲 し、面をなす部分もあるが、全体としては丸い。端 部を折り返して形成したために、口縁端部外面の下 端は粘土接合痕が明瞭に残っている。体部は、丸み を持つらしい。 ・外面 ヨコ方向ヘラミガキ 内面 ナデ ・外面 ハケ後ヘラミガキ 内面 ハケ後ナデ ・-	良好	S ₁ ₁	S ₂ ₁	S ₁ ₂	0	0	0	・淡黄灰色 ・黄灰色 ・濃灰色	
12-25 脚台 下層流路	縦部径 7.8cm (残存 1/2 からの回転復原) 残存高 4.4cm 体底部に接合された脚台は、僅かに外反しながら 下方に広がっている。被端部は面を成しており、正 面したときの安定を増している。端面の両端は鈍く なく、丸い。体部と脚台部接合部には接合痕が見え ている。 ・- ・- ・外面 ナデ 内面 ナデ	良好	L ₂ ₁	M ₁ ₁	M ₃ ₁	0	0	0	・黄灰色 ・黄灰色 ・淡赤黄灰色	
12-25 皿 上層流路	口径 18.0cm (残存 1/5 からの回転復原) 残存高 8.1cm 口縁部は、体部から屈曲して外上方にのびている。 口縁端部は、内面に肥厚し丸くおさめられている。 ・外面 ナデ ・内面 指頭による押圧およびナデ ・外面 ナデ 内面 ヘラケズリ ・-	良好	M ₁ ₁	L ₁ ₃	M ₂ ₃	0	0	0	・暗褐色 ・暗褐色 ・濃灰色	
12-27 小形丸底甕 上層流路	口径 10.0cm (残存 1/5 からの回転復原) 残存高 3.9cm 口縁部は、体部から大きく屈曲して外上方に直線 的にのびている。口縁端部は尖っている。 ・外面 ナデ 内面 ヘラケズリのちナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ ・-	やや 軟	O ₀ ₁	M ₁ ₁	M ₂ ₃	0	0	0	・暗黄灰色 ・暗黃灰色 ・暗赤灰色	
12-28 高杯か 上層流路	口径 14.2cm (残存 1/7 からの回転復原) 残存高 4.4cm 底部から屈曲した体部はほぼ直線的に外上方にの びている。口縁部はこの体部からさらにやや外側に 屈曲している。口縁端部は丸い。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ヘラケズリのちナデ ・-	軟	S ₁ ₁	L ₁ ₃	S ₁ ₂	L ₂ ₂	M ₁ ₁	0	・明赤褐色 ・明赤褐色 ・赤灰色	

図一遺物 番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚台部）	焼成	胎上						色調	備考
			長石	石英	角閃石	雲母	チャコート	赤色斑		
12-29 高杯 上冠流路	残存高 3.3cm 高杯杯部の、脚部との接合部付近である。外面は脚部との接合のために粘土を相当補っている。このため外面の形状は、杯底部から杯体部にかけて明瞭には屈曲しないで直線的にのびている。 ・一 ・外面 ヘラケズリのちナデ 内面 ヘラミガキ ・一	良好	S 2	0	⑤ 3	L 1 M 3	L 1	M 1	・暗灰褐色 ・淡褐色 ・淡灰色	
12-30 高杯 上冠流路	裾部径 13.8cm (残存 1/2) 杯部との接合は、完成した杯部を脚台上に載せるようにして接合したものである。杯底部の下面に径5mmの棒状工具で突き刺された痕跡がある。脚柱状部は下方に広がりながら直線的にのびたのち、裾部が大きく屈曲してラッパ状に広がっている。裾端部は面を成している。 ・一 ・一 ・外面 柱状部はタテ方向ヘラケズリのちナデ。裾部は指頭による押圧。 内面 柱状部はシボリメが残存。裾部は指頭による押圧およびヘラケズリ。	良好	L M 1	0	S 2	⑤ 2	0	0	・暗黄灰色 ・暗黄灰色 ・淡灰色	

図 版



第1次調査 全景(西から)



第1次調査 全景(東から)



第4次調査 調査区全景(北西から)



第4次調査 流路 検出状況(北から)



第4次調査 下層流路 南端断面



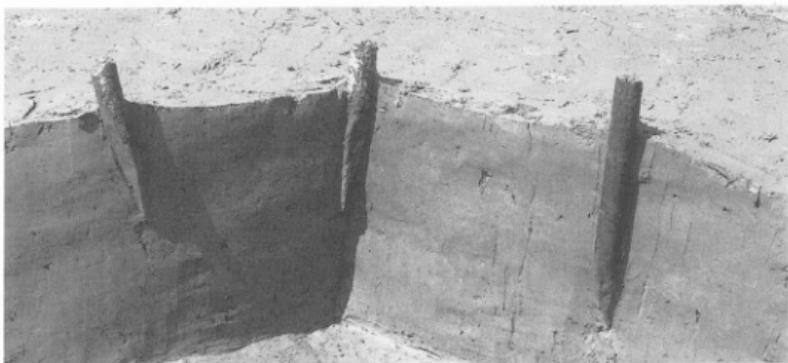
第4次調査 下層流路 G-H断面



第4次調査 流路検出状況(東から)



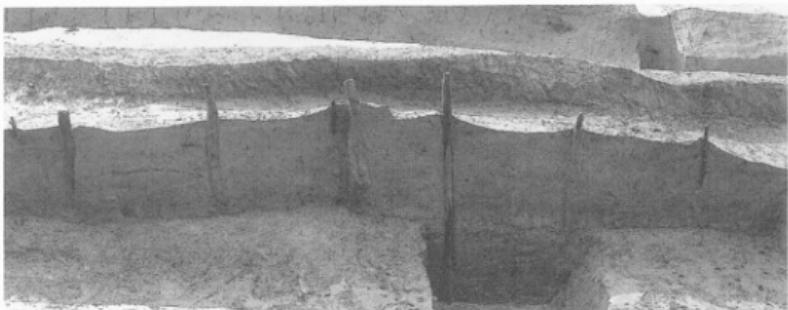
第4次調査 上層流路 護岸杭検出状況(北から)



第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(左から4・3・1)



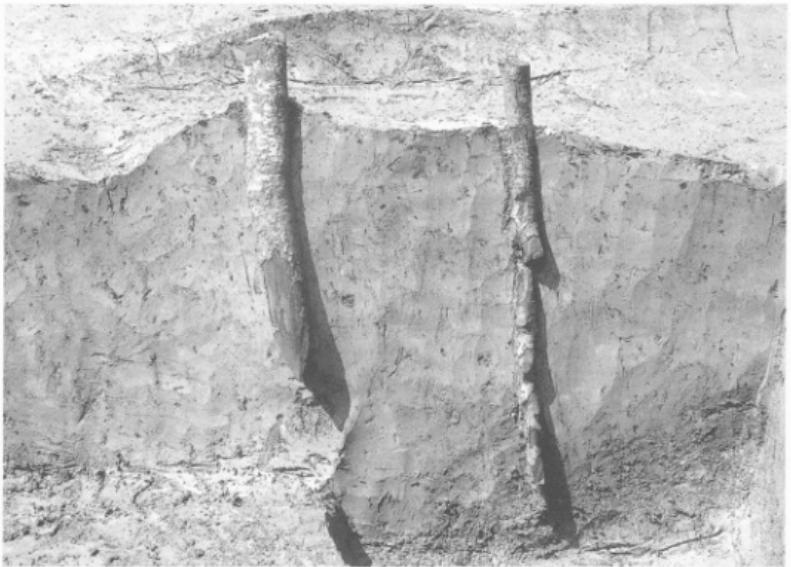
第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(左から19・17・16・14)



第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(左から30～25・23・21)



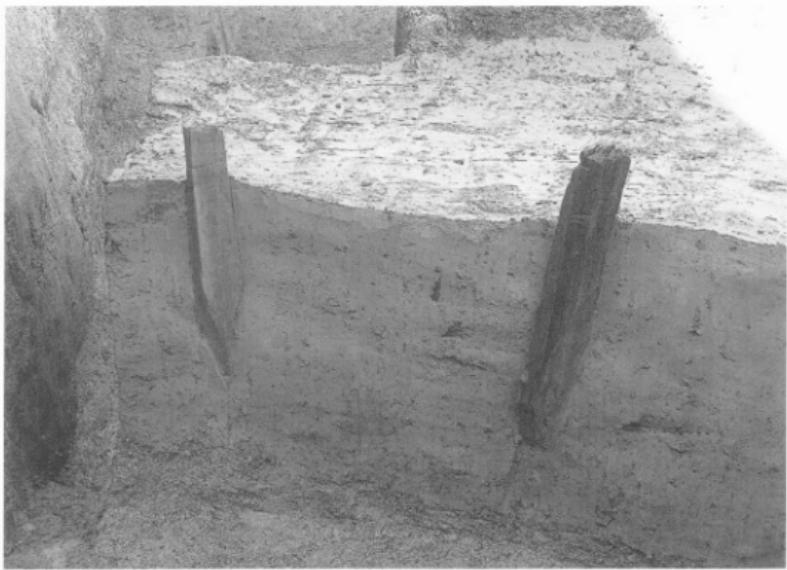
第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(左から28~25)



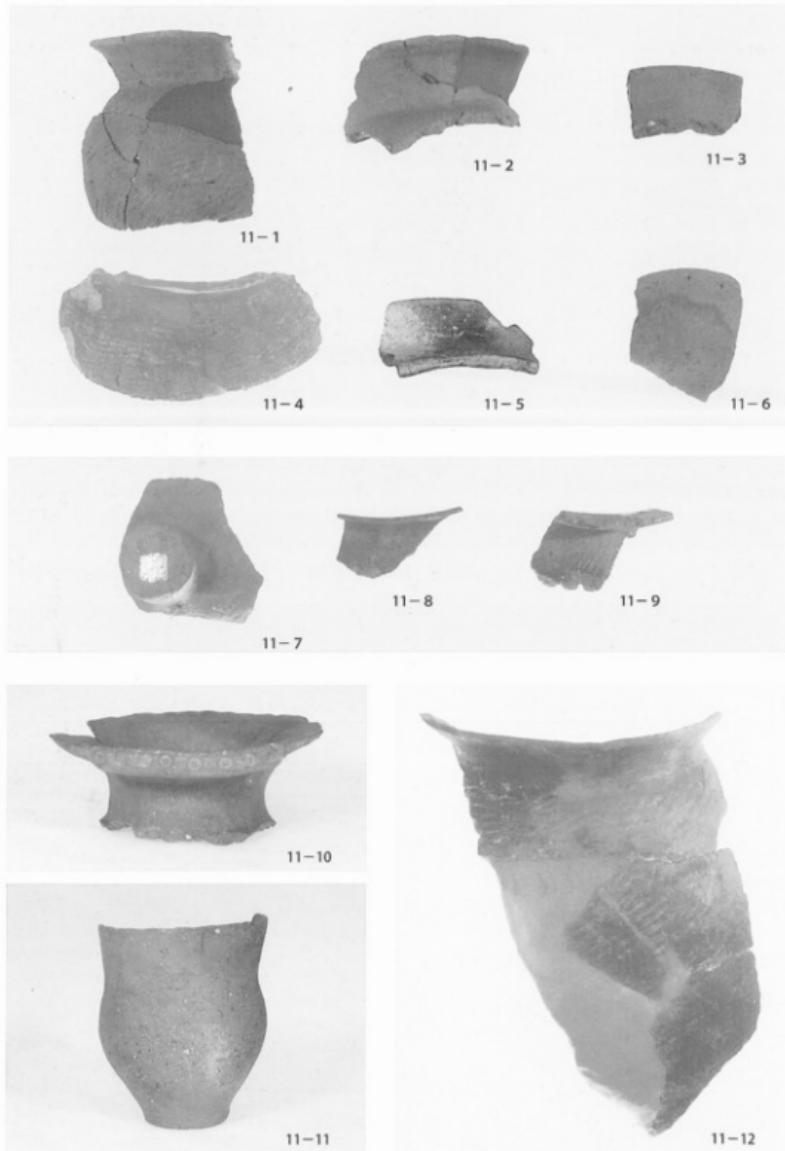
第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(左から12・11)



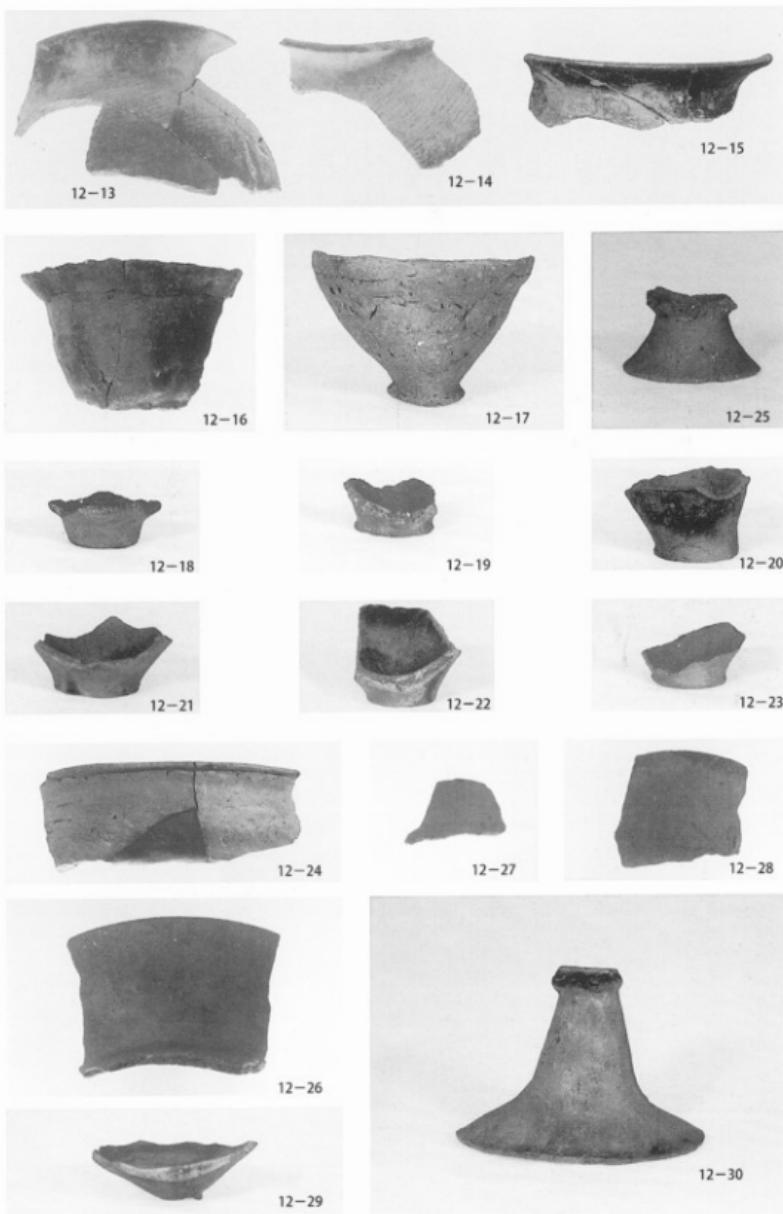
第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(31)



第4次調査 上層流路護岸杭 断ち割り状況(左から33-32)



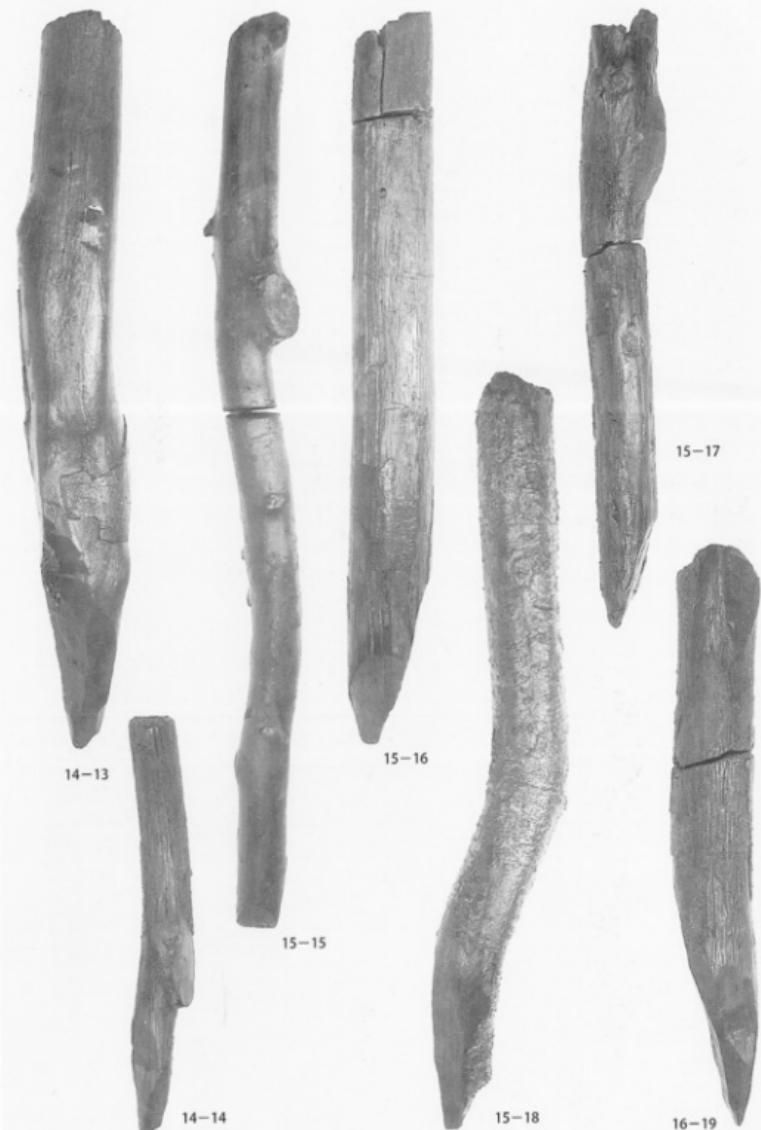
第4次調査 出土土器(その1) (S. 1/3)



第4次調査 出土土器(その2)(S. ≈1/3)



第4次調査 出土杭(その1) (S. 1/4)



第4次調査 出土杭(その2) (S.=1/4)

図版
12



第4次調査 出土杭(その3)



17-28



18-29



18-31



18-30



18-33



18-32



18-34

第4次調査 出土杭(その4) (S.=1/4)

報告書抄録

ふりがな	いまで いせき							
書名	今出遺跡							
副書名	第1・4次発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	木許 守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL 0745-62-3001							
発行年月日	西暦 2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
今まで 今出遺跡	奈良県御所市大字 蛇穴	29208		34度 27分 08秒	135度 44分 20秒	19900227 ～ 19900302 20060201 ～ 20060323	865	開発行為 に伴う事 前発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今出遺跡	集落	弥生・古墳	流路		土器・木杭		護岸杭を伴う古墳 時代前期後葉から 中期前葉の流路。	

奈良県御所市

今出遺跡

-第1・4次発掘調査報告-

御所市文化財調査報告書 第31集

平成19年(2007年)3月30日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市1-3

印 刷 橋本印刷株式会社
葛城市竹内365番地1(本社)